

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.85 2019年2月11日発行  
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369  
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

京浜協同劇団 第 92 回公演 創立 60 周年記念・第 1 弾

## 「おりん 姥捨て異聞」公演が開催されました

2018年11月16日～24日、10ステージが満席のお客さんを迎えて開催されました。出演された方、観劇された方から感想をお寄せいただきました。

「おりん」に出演して

### これからも劇団と共に歩んで行きたい

渡辺 そのこ

10月に入って、おりんの芝居の中で歌われる曲が、安達さんの作曲で出来上がった。

それが何曲もあって合唱になっていたり、ちょっとやそっとじゃ歌えないものばかり。本当に、これを歌うの？ 11月中旬からの本番に間に合うのか。幕開き最初の場面も、なかなか上手くいかないのに「えっ！これ私がやるの？」「いくら何でも無理があるんじゃない」常に頭の中はぐちゃぐちゃ。どうすれば50過ぎたおばさんが子どもに見えるようになるのか。「おりん」の稽古が始まったばかりの頃は、気恥ずかしさから吹っ切れず、真っ先につまずいてしまった。それでも、何度も抜き稽古をして演出や先輩にアドバイスを頂きながら、考えたり悩んだり、衣装が汗ばむくらい頭をフル回転させた。久々の体験だ。

「おりん」を上演すると聞いた時、じわじわと「参加したい」と思った。京浜の先輩と、以前関わった客



写真©長坂クニヒロ (以下同)

演の方と同じ舞台に立てることと、この芝居が京浜らしい舞台が出来るのではと思ったからだ

「おりん」は姥捨てのお話し。母は「おりん」の本番を迎える1ヶ月前の10月に老健に入所した。母は、7月頃から入退院を繰り返した。いきなり進む母の変化に「何なんだ、これは」と戸惑った。本読み稽古が始まっていた8月末、今私が芝居に関われるタイミングなのか迷った。妹に「よく、この芝居に関われるね。」と言われた。本当にその通りだ。でも、この芝居で、



この出演者のみんなに関われるチャンスは、この先あるかわからない。やっぱり、芝居に出たい。この芝居だから、日常のモヤモヤをぶつける思いでやってきた。稽古場の中では、娘と同じ年頃の方と芝居ができたり、稽古場の隅で台本を抱えてセリフを叩き込んでいる先輩の姿、不安だった合唱もお互いの声を聞き合えるようになったり、自分の予想以上に本番に向けて変化を感じることができた。

劇団も運営が大変のようだ。私の周りのあれこれも、いっぺんに解決できないが一つ一つ向き合うことしかないと思う。これからも、京浜協同劇団と共に歩んで行きたいと思う。(協力出演者・文化の仲間会員)



## 「この世はとうに姥捨山ヨ」の台詞が

富田 みどり

私が初めて「姥捨て」という言葉を聞いたのは、長野県人の祖母からだった。子ども心に何というひどいことをするのだろうと思ったことを覚えている。そして昭和という時代に生まれた自分を幸せだとも思った。

長野県には、姥捨て山と呼ばれている山がある（正式名は冠着山<sup>かむりき</sup>）。

戦国時代に甲斐（山梨）の武田信玄が、年老いた者は戦力にならず不要だと考えて、山に捨てるように命じたという話があるそうだ。事実かどうかは定かではないが、年老いたり、負傷したり、病に侵されたりした者が、戦国の世であれば不要の者と、切り捨てられることは想像に難くない。

貧しい暮らしの中で、家のお荷物とされる老人がいたことも察しがつく。特に長野県は土地が痩せ、山間地帯で作物を作ることがとても難しかった貧乏な県だから教育に力を入れてきたのだと、教師だった祖母からも母からも聞かされていた。



日本中あちこちでこのようなことが起こっていたのだろう。年老いて体が動かなくなり畑仕事ができない、しかし生きるためには食わねばならない。食い扶持を減らすためには、年寄りには山に捨ててこなければならぬ…。

「おりん」の又やんのように、「山に行きたくない」と思うのが人情だろう。しかし、おりんのように、覚悟を決めて家族のために山に捨てられた老人もまた、存在したのだろうことも察しがつく。

岩手県の三本柳さんさ踊りの保存会の会長さんのこんな話を聞いたことがある。

岩手県は、冷害のために貧しい土地で、かつて400年の間に、80回以上もの冷害があり、厳しい飢饉に見舞われたそうだ。

農民は、祈るしかなかった…と。祭りで力を合わせ、大自然の神々に踊りを奉納し、豊作を祈りながら生きてきたのだと。現在、岩手県には、民俗芸能の保存会が1000を越すほどあるそうだ。村人の心をつま



とめるためには、祭りはなくてはならないものであった歴史が、そんなところからも読み取れる。

「おりん」は、遠い昔の出来事のようにも見えるが、現代の日本は、どうだろう。安心して老後を過ごせるようになっているのだろうか。

老人の比率が高くなっている現代の日本は、子育てや福祉を削って、軍事費ばかりを増大させてきた政府の政策の失敗ではないか？

将来の不安感から結婚しない青年が増え、少子化が続いた日本。子どもや青年の貧困が叫ばれて久しいが、原発の輸出政策、軍備増強をいまだに進めようとする政府。このままでいいのか。

「この世はとうに姥捨山ヨ」の台詞が、胸に迫ってくる。  
(川崎太鼓仲間響／文化の仲間・会員)

「おりん」を終えて思うこと

## 貴重な現場に立ち会えた

若菜 とき子

「おりん」を終えて2カ月が過ぎ、公演の終了後は何となくむなしさも感じてはいましたが、さすがに2カ月を過ぎると日々うすれてきます。ホッと一息ついたところ、1月18日付新聞に「年金0.1%引き上げられる」4年ぶりのプラス改定だ!!?? 物価の伸び、賃金の伸びが0.6%に比べると上昇が小さい。なお年金積立金を外資株に投入し、14兆円の損失を出しています。200年前と今とは様相が違ってても暮らしの苦しさは変わっていない。独居老人の男性も女性もどんどん増えています。

子どもに苦勞はかけたくない、少しでも残して死にたいという愚痴を聞きます。世代交代が進んでいく中で私自身85歳になり、この先、親族や友人(劇団)に迷惑をかけたくない、これからどうすればよいか?



仲間から「暮らしの相談センター」を紹介され、さっそく相談し、委任契約、任意後見契約、死後事務委任契約等の公正証書を作りました。

「おりん」公演パンフレットの榎沢健さんをはじめ、劇団に大きな“力”を出してくださった笹岡敏紀さんも同様に「おりんばあやんは今だっているよ。そこらにさ。ほら、ほら、こっちに歩いてくるべ!」といます。

京浜協同劇団の「おりん 姥捨て異聞」は、今なお私たちの前に立ちふさがる何かを鋭く問いかけている。「おりん」を観た観客は、親子の情愛と今の政治への不安を毎日の暮らしの中でビシビシ感じたのではないのでしょうか。

そうした歴史的戯曲、事件にまみえることができ、貴重な現場に立ち会えたこと、役者として無上の喜びを感じさせてもらいました。

ありがとうございました。

(劇団員)

神奈川県演劇連盟合同公演 高津一郎追悼公演

原作・高津一郎(元麦の会代表) / 演出・横田和弘(劇団河童座)

# 鳥になった少年

現代と1944年を結ぶ糸が南の島パプアニューギニアと横浜を結ぶ糸に絡み合い一つの家族を翻弄していく(故)高津一郎の伝えたかったものとは!

日程 2019年2月23日(土) 13:00 / 18:00 開演

24日(日) 13:00 開演

会場 神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール

入場料 一般前売 2500円(当日3000円) 高校生 1000円 中学生以下 500円

出演 村田次郎(劇団蒼い群) / 高島明子・河野航也・渡辺奏・田中優里(劇団河童座) / 金谷陽子(劇団かに座) / 川西玉枝(劇団よこはま壺座) ほか

問合せ・申込先 神奈川県演劇連盟チケットセンター

TEL 080-5659-2757 (10:00 ~ 21:00・月曜休み)

メール: info@kenenren.org HP: <http://kenenren.org/>

## この日の舞台との出会いを嬉しく思った

中野 慶

原作と映画には出会っているが、深沢七郎『楢山節考』は舞台になるだろうか。その疑問も観劇の動機となった。京浜協同劇団の名前は半世紀前に都内の小学生として出会っているが今回が初めての観劇。脚本・演出家はおりんをどう描くだろうか。

フィナーレで迷いなく拍手を送った。何よりも役者たちが作り物ではなかった。単純明快な舞台装置に群像が映えていた。唄がこの上ない役割を果たしていること、原作の唄も用いながらそれに依存するのではなく、安達元彦のオリジナル曲で構成された舞台であることが想像できた。古層が残り続けている集落に似つかわしい曲想。篠笛も効果的だった。



台本を終演後確認すると、とぎすまされた台詞で興行が増している。独自の批判精神と諧謔もある。食べる、愛する、次代を育む、共同体を守る。それらの光と影が描かれていた。

おりん像は原作からさして厚みを増していない。饒舌になり、内面をさらけ出している訳ではない。それが自然である。若菜とき子の奇をてらわない演技が秀逸だった。

どこの村の何年前の話か。御一新と文明開化、大正デモクラシーなどのうねりとこの村の関係性などの問いが頭をよぎらずに、集中して観られた理由とは何だろうか。原作は人形か将棋のコマのごとく登場人物を扱っており、人間中心の思想とは対蹠的との解説もあるが（新潮文庫、日沼倫太郎）、原作とはやや異なる視線での作劇術を獲得した故に違いない。

帰宅途上で棄老伝説の真偽に思いを巡らせた。白萩（白米）は貴重品だが、畑と山と川の恵みに出会えるこの村が極度に苛酷な貧村と言えるだろうか。だがこ



# ちづる + One だふる！

石毛佳世子さんをお迎えして  
語りとピアノ

ライブ vol.1

日程 2019年3月3日(日) & 4日(月) 各14:00開演(13:30開場)  
会場 Art & Coffee Room 新紀元 (JR立川駅北口・徒歩2分)  
出演 秋山ちづる(ピアニスト)/石毛佳世子(女優)  
演目 妻よ薔薇のように～家族はつらいよⅢ(原作:山田洋次)/宮沢賢治の短歌のイメージによるピアノソング/ソナタ SONATA ～相馬幻想 ほか  
会費 3000円(予約制 席に限りがありますので、事前にご予約ください)  
主催 ぞうきばやし  
問合せ・申込先 秋山 080-6527-8196 caglueck27@hotmail.com  
石毛 090-4076-0765

の村では代々守り続けてきた掟をその具体的な作法とともに継承せねばならぬ。その重圧に抗える人々はいなかった。

ちなみに姥捨て山は現在まで変わらずという社会認識と、異質のスタンスを私は取っている。「人生百年時代」の下で多様な老後が存在する。原作刊行の 62 年前頃から農山村の風景と人々の生活も大きく変貌していく。人生観と健康観も同様に問い直されていった。今や医療水準は昔とは雲泥の差がある。納得できる高度医療を求め続ける人が多い。

だが孤独と貧困の晩年を過ごす人の存在、姥捨て山的な現実が根絶されていないのも事実だ。その意味で「おりんばあやんは、今だっているよ」という台詞への反発を感じなかった。

半世紀前の 11 歳は、この劇団を民藝などと一緒に新聞で記憶した。長年都内の職場（外面は良い民主的権威主義的出版社）で土日も仕事に追われ、早期退職まで川崎市民としての自覚が乏しく、観劇の機会はな



かった。安達元彦らの共著『ただうたいたいためだけにうたうのではない』と三十数年前に出会ったことも思い出す。その後どこかで誰かが氏の歌を歌ったのをきくと聞いたはずである。

高度成長期の京浜工業地帯で産声を上げた劇団の 60 年に全く無知ではあるが、この日の舞台との出会いを、前史を想起ししながら嬉しく思った。

(作家・川崎市宮前区在住)



## 第 13 回 腹話術のつどい

# 腹話術の会きずな発表会

腹話術をはじめ、マジック、笑点、ボードビルなど楽しさ満載。腹話術の体験もできます。子どもさんにはプレゼントあり。

日 程 2019 年 3 月 10 日(日) 午後 1:30 ~ 4:30

会 場 川崎市総合自治会館ホール (武蔵小杉駅・徒歩 7 分)

入場無料 自由席 (先着 200 名様) 招待券持参の方優先。招待券お申込みは下記へ。

出 演 佐々木正雄・草野みつ子・工藤美代子・棗銀之助・伊藤むつ子 ほか多数

特別出演 しろたにまもる ゲスト出演 やまけいじ

問合せ・申込先 腹話術の会きずな TEL/FAX 044-544-3737

〒 212-0051 川崎市幸区東古市場 9-21 (城谷方)



第12回お正月お楽しみ会

## みんなワイワイ、ガヤガヤと

藤井 あつし

「みんなで さそって き・て・ネ まってるよん (ゴロー)」に誘われて1月13日(日)に、京浜協同劇団の劇場に出掛けました。実際は「人手が足りないので手伝ってくれないか？」というお誘いによる。

城谷さんとゴローちゃんの司会でお楽しみ会は始まった。出番のトップは川崎モダンダンスグループによる「ジュニアダンス」。

毎週土曜に、劇団を借りて練習をしているそうで、かなり迫力のあるリズムカルなダンスを披露してくれました。中に1人だけ男の子が参加していて眼を引きましたが、印象に残る見ごたえのある舞台でした。

次は、「ジャグリング」です。清水まさる氏演じる「チェン」の芸名で登場です。箱を使ったり、球を使ったり、光るコマとひもを使ってのコマ廻し。とても多彩でした。光るコマは眼にも鮮やかで引きつけました。最後は円柱の上に板を置いてバランスをとってのジャグリングでした。見物していた男の子が散らばってしまった箱を集めるお手伝いをしてくれました。

そして、「こどもフラダンス」です。何曲やってく



れたのだろうか？ 沢山の曲を踊ってくれました。マラカス(花)、イツ(ひょうたん)、ブリリ(竹)を使ったの踊りです。曲によっては、ウクレレの伴奏で、踊ってくれました。ウクレレは、急遽この日のために練習をしての参加だそうで、大人も交じっての演奏です。踊りには、小さい子も交じって踊っていましたが、下から2番目ぐらいの小さい子は、周りのお姉さんの格好をまねて踊っていたのは印象的でした。ハワイアンの基本動作を含め、華やかな舞台でした。

次は、「南京玉すだれ」です。太鼓仲間響の3人が演じました。「玉すだれ」を使っていろいろの形を作っていました。最後に演じた「しだれ桜」は大変綺麗でした。さらに余興で、獅子舞が登場。小さい子は獅子に驚き、怖がっていました。



最後の演目は、皆さんお待ちかねの、もれなく参加賞がもらえる「輪投げ」ゲームです。小さい子、大きい子、大人と別れて1人2本の輪を持ち、9本のゲーム台に向かって一定の距離から投げてゲーム柱に輪っかを入れるゲームです。ゲーム柱に輪っかが入るとリボンがもらえます。

時間内に何回でも挑戦できるので、みんなワイワイ、ガヤガヤと楽しんでいました。

ゲーム終了で、リボンの数を数える段になって、子どもたちがその前に大人から譲ってもらっていたリボンを、子どもたちが大人に返していた光景を見て、「子どもでも、ズルやウソ、改ざんはいけないこと」って、分かっているのだと感心しました。「安倍ちゃんも見習うべきだ」と考えさせられました。

会場は、そんなに広くはないが、もっと子どもたちが一杯で、ワンサカしていると思っていましたが、そんなに多くはなく、期待外れな感じがしました。

(文化の仲間会員の友人/横浜市在住)

# 今回のパフォーマンスが自信となり

清水 大

1月13日(日)に、京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間主催の「お正月お楽しみ会」に、パフォーマー“ちえん”として参加させていただきました。

私は先日、京浜協同劇団第92回公演「おりん 楯山節考」にて、多吉役として出演させていただきました。神奈川県演劇連盟所属の団体「虹の素」の劇団員として、初めての客演でした。始めはスケジュールの関係で、稽古に参加することが少なく、迷惑をかけてしまったのではと、不安になることもしばしば…。何より、年齢的にも上の方々ばかりの環境も初でしたので、不安は山ほど。そんななかでも、自身の演技プランが通ったり、細かなアドバイスを頂きながら稽古を



重ねているうちに、稽古場に出向くことが楽しみになっている自分がありました。本役とは別で、プロローグ後の歌で、小川がこうさん製作のカラスを持って、登場するところがあるのですが、おそらく、ここ一番で力を入れていたかもしれません。決して、他は手を抜いていたとかではないですよ。観劇された友人にも、何故か多吉以上に、カラスを褒められました。

話は戻りまして、今回、ジャグリングをメインとしたパフォーマンスをやらせていただきました。話が飛んできたのは12月でした。お楽しみ会が開催されることは、公演時期になんとか知っていました(記事に書いてあったものを覚えていました)。まさかお話が来るとは思っていなかったのですが、驚きましたが、私の本業こそがパフォーマー。舞台とはまた違った一面を見せられたらなと思い、披露させていただきました。



た。会場は、大きい看板で「お楽しみ会」とあり、地域でも愛されている、盛大なイベントなのだと感じ取れました。そして控え室。公演の際にお世話になった方々が揃っていて、なんだか懐かしい気持ちで。

しかし、機材道具の確認をした際に、ワイヤレスマイクとリモコンを忘れてきたことが判明。マイクがないのは、まだ平気なのですが、リモコンがないということは大きな問題で、音源とリモコンを接続することで、自身のタイミングで選曲、音量を調整できるので、自由度の効いたパフォーマンスをできるのです。しかし、それを忘れてしまったので、すぐに音響を担当している河村さんと音響のタイミングを打ち合わせ、本番に臨みました。

パフォーマンス自体は、ディアボロ(別名、中国ゴマと呼ばれるもの)を、ライトアップで披露したのですが、照明を落としてくださり、さらに綺麗に見えるパフォーマンスができたのではないかと思います。音響、照明さん、他お客様に助けられました。

なんだか、感想文のような文章になってしまいましたが、今回のパフォーマンスが、自信となり、今後待ち受けているイベントに、挑んでいこうと確信しています。また、何かしらで関わっていただけるとも思っています。



連載 「京浜協同劇団」と私——第7回

# 最初の仕事で出会った人たち

岡田 京子

前号の終わりに書いた、秋田の小学校の先生方のことを、もう少し詳しく書いてみたいと思います。秋田の若い青年たちの中で始まった「歌の会」は、歌だけではないたくさんの方のことを私に教えてくれました。

戦中戦後のどさくさが、やっと静まったかに見える時期、と言ったらいいでしょうか、この間にこういう形で出会った数人から10人くらいの小さな集いは、どこでも人間らしい明るく暖かい雰囲気満ちていました。おかげでそこでかわされた方言が、私は50年以上経った今も忘れられず、今も安達との日常では生活の中に溶け込んでいて、秋田弁で暮らしているのです。

「オレの(女でも自分のことをオレといいます)〇〇、どこさ置いたんだべ」「ホレ、そこにあるのがおめえのでねえか」「あ！んだんだ」という具合です。(ほんとですよ)

そして何故か美人が多くて、一見どこの令嬢？と思う人に「この歌コ、オレ好きだなあ」なんて言われたりするとゾクゾクするほど嬉しかったりしたのです。

大体どこの村でも、小学校のオルガンがある部屋でやりました。10人前後の青年たちの中に、2・3人の先生方が必ず参加されていました。みんなの中に全く普通に居られて、何か必要なことがあれば、ごく自然に動いてそれを満たして行かれる姿が忘れられません。

学校では私は、大体宿直室に泊めてもらいました。宿直の先生はどこか別の所、体育館の裏の物置部屋のような気がしたこともありましたが、こんなことは、本当に今は考えられないのではないのでしょうか。暖かい雰囲気を持った先生たちにどんなに助けられたかわかりません。

朝、目が覚めると、宿直室の前に必ず大きな風呂敷

包みが置かれていました。青年たちの家で取れた野菜や、お米です。これは「わらび座」へのお土産で、私はそれを両手に提げたり担いだりして、田んぼの道を歩いて、列車に乗って、わらび座に帰るので、重いのはとても辛かったけれど、わらび座のみんながとても喜ぶので、その笑顔を思うと心が軽くなったものでした。

その他、職場や組合のサークルにも行きました。国鉄や電産(電気産業労組)や、病院は看護婦さんや事務の方達のサークルなどが、当時はたくさんあったのです。今では考えられないようなこうした雰囲気が、職場や組合や学校からも産まれていた時代だったことを懐かしく思います。

今、岩手の奥州市に居られる90歳の菅原恭正先生も、当時のこんな先生方の一人でした。そしてその面差しも生き方も、今も変わってはおりません。

私はこういう中で、初めてアコーディオンを弾くようになりました。学校にはオルガンがあったけれど、みんなの雰囲気を支えるにはちょっと地味でした。そんな状態を感じてくれていたわらび座が、なんとこのためにアコーディオンを買ってくれたのです。貧乏なわらび座としては、小さいアコーディオンでしたが大変な出費だったと思います。

それを持ってみんなの所に行った日は忘れられません。躍り上って喜んでくれたのですが、すぐがっかりしました。私があまり弾けなかったからです。どうにか右の手は使えたけれど左手は全く使えませんでした。「なんだァ、弾けねえんでねえの！」とみんなががっかりした声が忘れられません。右手の鍵盤はわかるけれど、左のボタンの機能がわからず、一生懸命稽古したものです。とにかくみんなに見守られながら少しずつ使い物になっていったのでした。

写真・筆者提供 (およそ30年前の写真。左から3番目が筆者)



# 市民劇「日本民家園ものがたり」 全国に誇る文化遺産を劇化

制作 城谷 護 (京浜協同劇団)

第7回となる川崎郷土・市民劇は今回、川崎市日本民家園を採りあげることになり、既に稽古に入っています。

作者は、青少年演劇作家でこれまで上演した市民劇の台本6本すべてを書いてきた小川信夫氏(多摩区在住)です。演出には、4年前に上演した『華やかな散歩』(佐藤惣之助を描いた作品)の鈴木龍男氏(劇団前進座)を招きました。

多摩区の生田緑地にある日本民家園は今から52年前の1967年(昭和42年)に開園した古民家の野外博物館です。東日本の代表的な古民家をはじめ、水車小屋、船頭小屋、農村歌舞伎舞台など20数棟もの建造物があり、川崎が全国に誇る文化遺産となっています。見学者は年間11万人を超え、うち外国人も6千人以上となっています。

ところで、この民家園も開設にこぎつけるまでには大変な紆余曲折がありました。今の麻生区金程にあった伊藤家は学術的にも貴重な古民家でした。ところがその家が横浜の三溪園に移設されるというのです。それを聞いた古江亮仁はこの貴重な古民家は川崎に残すべきだと奔走します。しかし、既に県が三溪園への移設を決定しており、それを覆すのは至難の業でした。当時、川崎市の文化財担当職員にすぎなかった古江一人がいくら頑張ってもできることではありません。で

も古江は諦めませんでした。古江は横浜国大の大岡博士にも力を貸してくれるよう懇願しました。川崎の斎藤県議も横浜の飛鳥田市長や川崎の金刺市長に働きかけました。古江の熱意は多くの人々を動かし、ついに伊藤家を残すことが実現、川崎市議会も民家園開設を決めたのです。

この物語は、こうした古江の奮闘ぶりを軸に、昭和30年代、全国から川崎に集まってきた労働者の姿も描きます。

その中に飛騨から出稼ぎに来ていた太田一生という労働者がいました。お菓子の老舗「仙臺屋」が飛騨の白川から古民家を川崎に移し、料亭として使っていた「白川郷」は、その太田が懐かしがって呑みに来る癒しの場でした。しかし、ふとしたきっかけから競輪、競馬に手を染めるようになり身を持ち崩します。妻と娘が訪ねてくるのですが、彼はもう……。こうした感動的な場面も描かれ、当時の川崎の情景が映像を使ってリアルに映し出されます。沖縄舞踊も花を添えます。

プロのスタッフが裏をしっかりと支え、市内の劇団や演劇人、公募の市民、プロの俳優たちが生き生きと演じます。私たち京浜協同劇団は今回も俳優やスタッフとして全力を挙げて取り組みます。

皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

## 第7回川崎郷土・市民劇



公演チラシより

作 小川信夫／演出 鈴木龍男 (前進座)

日程 2019年5月10日(金) 18時30分／11日(土) 14時  
12日(日) 14時

5月18日(土) 14時／19日(日) 14時 エポックなかはら

入場料 一般2900円 親子券3500円 学生・障害者1000円 指定席3600円

問合せ・申込先 川崎郷土・市民劇上演実行委員会 (川崎文化財団内)

〒212-0052 川崎市幸区大宮町1310 ミューザ川崎セントラルタワー5階

TEL & FAX 044-555-0588 HP: <http://www.kbz.or.jp/event/citizentheater/20190510/>

◎文化の仲間通信◎

◆特別展 顔真卿 王羲之を超えた名筆

日程 1月16日(水)～2月24日(日)  
09:30～17:00(金・土曜日は21:00まで/休館日  
月曜日)

会場 東京国立博物館 平成館(上野公園)  
料金 一般1600円 大学生1200円 高校生900円  
中学生以下無料

眺めているだけで、こころが洗われる。人間が清く  
生きることは、このようなこかたちかと顔真卿は教えて  
くれる。

問合せ 03-5777-8600(ハローダイヤル)

<https://ganshinkei.jp/>(公式サイト)

◆劇団銅鑼第52回公演

花火鳴らそか ひらひら振ろか

日程 2月15日(金)～21日(木)  
14:00または19:00開演(詳細問合せ)

会場 あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流セン  
ター)東京メトロ有楽町線東池袋駅6・7番出口直結  
作 小川未玲/演出 松本祐子/出演 佐藤文雄・長  
谷川由里・館野元彦ほか

料金 一般5000円 30歳以下3500円(全席指定)  
花火がつなぐあの世とこの世。とあるお盆のちょっ  
と不思議な物語。

問合せ・申込み

劇団銅鑼 03-3937-1101(平日10時～18時)

<https://ticket.corich.jp/apply/94042/>

◆劇団民藝公演 正造の石

日程 2月14日(木)～25日(月)  
13:30または18:30開演(詳細問合せ)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA  
作 池端俊策・川本瑞貴/演出 丹野郁弓/出演 樫  
山文枝・仙北谷和子・伊藤孝雄ほか

料金 一般6300円 夜チケット4200円  
25歳以下3150円 高校生以下1000円

明治末、谷中村。家も、村も、すべて失った新田サチ。  
でも、だから、生きていく東京で。女性活動家、福田  
英子との運命的な出会い。戸惑い、怒り、裏切り、恋  
……。できるかもしれない私にも

問合せ・申込み

劇団民藝 044-987-7711(月～土10時～18時)

◆劇団埼玉第101回公演 キネマの天地

日程 3月9日、10日、16日、17日  
各14:00開演

会場 劇団埼玉アトリエ  
(埼玉新都市交通ニューシャトル吉野原駅徒歩20  
分/駅改札から送迎あり。劇団へ問合せ)

作 井上ひさし/演出 川村武夫/出演 水村照江・  
長本里美ほか

料金 一般2000円 小学生以下無料

座席に限りがあるので予約優先

映画と芝居を愛した井上ひさしが書いたあの時代を、  
蒲田行進曲に乗せてお届けします。

問合せ・申込み 050-3479-0481(留守電)

FAX048-777-4430

<https://gekidan-saigei.jimdo.com>

◆明治大学平和教育登戸研究所資料館 第9回企画展  
帝銀事件と登戸研究所

日程 2018年11月21日～2019年3月30日  
10:00～16:00(休館日2月7日)

会場 明治大学平和教育登戸研究所資料館  
(明治大学生田キャンパス内)

入館料 無料

特別プログラム 映画「帝銀事件 死刑囚」上映会  
2月23日(土)13:00 定員280名(無料・予約不要)  
1948年1月に起きた大量殺人事件「帝銀事件」。こ  
の事件で使用された毒薬は登戸研究所で開発された暗  
殺用毒物「青酸ニトリール」が有力とみなされた。警  
視庁捜査係長の残した膨大な文書を読み解いて様々な  
関係に迫ります。

◆田楽座 新宿公演 伊那の祭り衆、新宿に参る

日程 3月31日(日) 13:00開演

会場 新宿文化センター大ホール(新宿駅東口より徒  
歩15分)

料金 一般4500円 S席5500円  
子ども(高校生まで)2500円

特別出演 阿波踊り(新宿区役所つつじ連/伊那市桜  
華連)

太鼓/踊り/囃子/民謡/獅子……そうだ、忘れか  
けた日本に会いに行こう!

問合せ・申込み 田楽座 0265-78-3423

◆青年劇場第121回公演 つながりのレシピ

「妻が遺した一枚のレシピ」山田和夫著より

日程 4月5日(金)～14日(日)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

作 福山啓子/演出 関根信一

元ホームレスや精神障がい者と共に進める「順調に  
問題だらけ」のパン作り。定年直後に妻をがんで失い  
孤独に陥ったサラリーマンが、生きづらさを抱える  
人々と向き合うことで見えてきたものとは…?

問合せ・申込み 青年劇場 03-3352-6922

■文化の仲間ギャラリー■

大谷 敏行◎

厚 労 省 官 僚 様 へ の 功 労 賞	三 人 が 不 作 為 と い う 罪 深 さ	「 二 島 で も 」 沙 汰 止 み だ け は 避 け た く て	敗 戦 の 無 限 責 任 エ ン ド レ ス	戦 時 下 の 徴 用 工 と 言 う 奴 隸	「 嚴 選 」 大 谷 敏 行 の 川 柳 塾
	二〇一八年十二月『朝日新聞』掲載	二〇一八年十一月『朝日新聞』掲載	二〇一八年十一月『朝日新聞』掲載	二〇一八年十一月『赤旗日曜版』掲載	